
インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

学生逃避

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

【Zコード】

Z6264Y

【作者名】

学生逃避

【あらすじ】

ISを使えることから、半ば強制的に入学させられた男、織斑一夏。幼馴染の篠ノ乃箒と再会し、数ヶ月が立ち四組に転入生が来るというニュースが舞い込んできた。その転入生は一夏や箒がよく知る人物だった。

処女作品なので、下手です。それでもよろしかつたら、どうぞよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

短いですがよろしくお願ひします！！

プロローグ

インフィニットストラトス、通称IS。現在存在している兵器をはるかに超える戦闘能力を誇る。

しかし、これには一つ欠点がある。

それは、女性にしか使えないこと。

これにより世界は、女尊男卑が当たり前の世界に変わった。そして、ある男もISによって変わったのだ。

？？？視点

「本当にいいんだな」

「ああ、構わないさ」

俺は、目の前にいる男にそう言つと、男は心配そつた表情をしながら椅子に座る。

「なら良いんだが、あいつらは納得しないぞ。今も騒いでるんじ

「やないか？」

確かに納得しないだろうが、もう決めたことだ。変えるつもりはないし、それに最後にはわかつてくれるはずだ。

……多分、……おそれく、……うん。

「まあ、あいつらのことだから襲いつてでも止めに来ると思つが、私が話しておひつ。行つて来い」

そして、俺は向かう。場所は……

プロローグ（後書き）

……短い！！

短すぎますね（泣）

ですが、今後ともよろしくお願いします。

1 真（前書き）

連続投稿です。少しばかり話を作っているので早く出せればいいな、と思っています。
では、よろしくお願いします。

男はある建物の前にいた。そこはIS学園。しかし、ISは女性にしか使えないため必然と女子校となっていたのだが、あるニュースが世界に配信された。世界で唯一IS使える男が現れた。その男の名は、織斑一夏。しかし、今此処に三人目の男が学園の門を潜る。

一方、世界で初めてISを動かした一夏は自分の姉であり、担任である織斑千冬の授業を受け終えていた。授業内容は、二組とのISの実戦訓練。そして今はIS訓練機の片づけをしていた。

一 夏視点

「ふう、これで終わりですか？山田先生？」

「はい、お疲れ様です。織斑君」

俺に労いの言葉を言つてるのは、一組の副担任の山田先生。いつもあわただしく子供っぽい先生だが今回の訓練で国家代表候補生を一人同時に倒してしまった実力を持つ人。戦闘のときのように普段もしつかりしてればイイのに、神様もひどいよな。

「織斑君? どうしましたか?」

「いいえ! 何にも!」

いけねな。山田先生が心配して顔を覗き込んで来て、その際に豊満な胸が揺れるわけで。

「お、織斑君! お、男の子だから仕方ないかもせんけど。あまり見ないでほしいんですけど」

「あーその~。す、すみません」

そして、気まずい空気と沈黙が漂つ。まずい、話題を変えなれば!

「そう言えば、朝にほかの組にも転入生がいるって話があつてんで
すけど、先生は何か知りませんか？」

「あ、はい。確かに四組に転入生が来るということなんんですけど
-
-
-」

「ですけど？」

「まだ来てないんですよ。連絡もなくて」

不安そうな顔をしながら『う山田先生。確かに心配だな。

「でも、織斑先生は『あいつのことだから心配しても無駄だ』なん
て言つて居るんですよ」

千冬姉がそんなことを。それに『あいつ』って一体？

「山田先生」

「あ、織斑先生。どうしたんですか？」

なんてことを考えていたら千冬姉が現れた。いつの間にいたんだ。

「例の転入生が来たんでな、私がそいつの世話をしなければならないんだ。だから、午後の授業は私の代わりに頼みたいんだが」

「あ、やっと来たんですか！いやー心配してたんですよ

「千冬姉転入生つい - - -」

スパ――ン――

「織斑先生だ、バカ者」

清々しいぐらいの叩き方ですけど千冬姉、今何万もの脳細胞が死んだぞ。少しば加減をしてほしいぜ。

「何やつているんですか、千冬さん」

ふと千冬姉の後ろから男の声が聞こえた。え、男？

「お、織斑先生。後ろにこいる男の子は一体？」

「こいつが、転入生だ」

「「え？」」

「はい、そうです」

やう言つた男は黒髪が目を隠すぐらいの長さで、身長は俺よりも少し低いぐらいで華奢な体つきをしている。そして、なんだか懐かしい感じがする。

「久しぶりだな、一夏」

「え、何で俺の名前を?」

「何だ、忘れたのか?薄情な奴だな

なんか呆れられているみたいだけど、つて千冬姉もため息つかないでくれよ。

「あの、どなた様ですか?」

「仕方ないな。おー、答えてやれ

「はいはい、わかりましたよ。千冬さん」

「おー！そんなことを言つたら千冬姉の鉄拳制裁が……って言つてゐそばから……」

サツ…!!

え、避けた？

「おつかないですよ。千冬さん……いや、織斑先生つて言つた方がいいですか？」

「初めからそいつ言え

バカ者、と小言を囁く。

「お前今何やつたんで」

「え、普通に避けただけだけど」

「何サラッと言つていいんだよーあの千冬姉の出席簿を避けるなんて、

「人間技じゃない」

「それは遠まわしに人間じゃないって言つてるよな」

あれ?なんか○○になつてているんだけど。

「織斑、こいつは打たれ弱いんだ。あまり気にするな

「わ、わかりました」

「ええ！…いいんですか？！」

山田先生がおひおひしながら言つ。そんなことよりも

「すまないが名前まだ聞いていないんだが」

「落ち込んでる人に慰めの言葉も言わないと、貴様は鬼か！…
ああ、鬼の弟か」

「ドスツ！…！」

ああ、今度は当たつた。

「鬼とは誰のことだ？ぜひ教えてほしいものだな」

「すみません！だから、今振り上げている出席簿の下に『まだ生き
！俺まだ死にたくない！』」

必死になるよな。俺だって死ぬんじやないかって思つ」とあるか
らな。

「じやあ、やつをと皿口紹介しますか」

頭を搔きながら男がこちらを向く。

「本口から！」お世話をなる黒翼
斑鳩だ。よろしく！」

1 真（後書き）

……変じやないでしょうか？

それが一番の不安です。

お駒がしいようですが、感想をいただけるのなら、お願いします。

2 翼（前書き）

今日は不安です。

大丈夫でしょうか？

-----六年前-----

「一夏、元氣でね」

「斑鳩こそ、またいじめられるんじゃないぞー。」

「氣弱そうな少年、斑鳩を心配する一夏。新しい場所で大丈夫なのか心配していた。」

「大丈夫だよ。そんなに心配しないでよ、一夏」

「お前は弱いからな、何かあつたら連絡しろよな！俺がすぐに行くから！」

「…それは篠ちゃんに言つてほしかったな」

斑鳩は一夏に聞こえないようになつた。斑鳩は篠が一夏のことが好きだと知っていた。

知った時は驚き、そして自分のことのよつと喜んだ。だから、篠の恋が成就するように協力していたのだ。

しかし、篠は一夏の関係で一夏たちに向も言わざつてしまつた。

「斑鳩ー、そろそろ行こうぞ」

「わかつてゐよ。じゃあね、一夏」

「おつかれさう、一夏」

そして、斑鳩は一夏たちとの思い出の地去つた。

「お前あの斑鳩か！？」

斑鳩視点

「あのつて何だあのつて」

「全く失礼だぜ一夏。いへり俺が世弱虫だったからつて言つていい」とと悪いことがあるだらう。

しかし、俺も鬼じゃないから許してやるわ。

「千冬姉聞いてないぜ！斑鳩が来るなんて！」

「ドカツ！－

「何度言わせるんだ」

「うわあ、千冬さんマジ千冬さん。相変わらずの鬼のよつてのよつに怖いな。

「黒翼、お前、まだくらこたいなひもつ一度やつてやるわ。うねじいだるわ」

「いいえ！一夏はうれしいだらうけれども、俺は全然うれしくないですから！！」

なんで分かつたの、織斑先生。

「お前も一夏みたいにわかりやすくなつたから分かつたんだ」

「いやあ、変わらないな」

なんだか視線が集まっているような気がするんだよ。

まあ、男が此処にいるなんておかしいしな。一夏は気にせずに話しかけているので、俺も視線を気にしながらも話を聞いている。

「斑鳩は変わったな。お前もエスを動かしたのか？」

「ああ、せりに専用機も有るのさ」

俺は腰に鎖の付いた懐中時計を一夏に見せる。色は灰色で鳥の絵が描かれている。

「へー、ならあとで模擬戦しようぜ」

「いいが俺は強いぞ。瞬殺しちまつぜ」

「負けないぜー！」

「こんな会話をしながら俺達は屋上に向かっている。

なぜかと言つと筈が昼飯を一緒に食べようと一夏を誘つたらしい。
十中八九一人つきりで食べたいと見た俺は断つたが・・・

「大丈夫だつて！みんないいやつだから」

と言つて、わかつてないよこいつおやぢく。ほかの女性も誘つた
のだろう。

全く変わっていないね。筈がかわいそうだな。

「一夏」

「何だ？」

「予言じてやる。いつか簞に背中を刺されつてな」

「は？ どういふ意味？」

なぜわからないんだ、このバカは。

「やはり、お前は少し変わった方がよかつたよ」

「？？」

そんなくだらない話をしている内に屋上に続く扉の前に着いた。

「しかし、屋上が開放されているなんてな」

「まあ、珍しいって言つたら珍しいよな」

そして、いや扉を開ける時に俺は一夏をいじるアーテアが浮かんだ。
一夏、待つてろよ。

その時の顔はきっと悪い顔だったろう。

- - - 篇視点 - - -

私、篠ノ之篠は今機嫌が悪い。その原因は一夏なのだ。一人つきりで昼食を食べようと誘つたのだが、あいつは他にセシリヤや鈴、デュノアを誘つたのだ！全く！せつかく一人っきりになれると思ったのだが一夏め！あとで居合切りの練習台にしてやる！

「あら、篇さんどうかしたしたか？なんだか」機嫌斜めのようですが

けれども

「みんなに眉間にシワを寄せていると老けたるわよ、篠

クッ！こいつら、私を心配しているが顔がにやけてるーー夏、お前は微塵切り決定だ！！

トントンー

？ん、何だ？

「篠ノ内さん、ごめんね、本当は一夏と一緒にきりで食べたかったんだよね？」（小声）

「い、いやーそんな」とはありえないーー

「クス、やつこいつ」としておへよ

「それにしても一夏さん遅いですね」

「何か山田先生と訓練機を片付けているみたいだけど」

それにしても遅い。ま、まさか、私の約束を忘れてほかの女子とかやっているんじゃないか！？

「一夏さん、大丈夫でしょうか！」

「大丈夫でしょう。あの馬鹿を心配しても無駄よ」

「あら、鈴さん。他人を心配するのは普通のことだと思いますわ」

そして、睨み合つ二人。背景に炎が似合つそうな雰囲気が続いていた。いふとなくやら話声が聞こえてきた。

「」の声は一夏の声だ！ん？待てよ。一夏は誰と話しているのだ。

此処はエジ学園。つまり女性しかいない。話しているのは必然的に女性になる。

「　　一夏（さん）……」

さつきの雰囲気はどうにダストショートしたのか、三人がシンク

口した。そして一夏が屋上に現れ問い合わせた。

「一夏、いつまで待たせるのだ！それにさつきまで話していたのは誰だーー！」

「お、笄。実は斑鳩が来たんだよ」

「斑鳩? どこにいるのだ?」

「なに言っているんだよ。俺の後ろに - - - あれ?」

「誰もいないではないか。あれ？では誰と話していたのだ？」

そう言いながら一夏に近づいたとき

「うわあ！！！」

「第一つてうわあ！」

後ろから誰かに押され体勢を崩し一夏もろとも倒れてしまった。

「痛たた」

「大丈夫か？ 篠」

「ああ、大丈 - - -」

そういうかけた時私は今自分がどのような状態なのか知った。私が一夏に覆いかぶさるようにつまり、押し倒すような体勢になつていた。

「ツー！」

「おい、 篠？」

ち、近いぞ！一夏！し、しかしこの状態はいいかも知れない。これで一夏が少しでも意識するなら！

「いいじゃあないか。俺は簾が好きなんだから」

「い、一夏ー？そ、その・・・ち、近い・・・の、だが

「なあ、簾」

「そう言いながら一夏は簾に近づいてくる。

「私もす、好きだが・・・」、こんな人いつ来るかわからない所で

といいながら心の中ではドンと来いーと構えている篇であった。

「いいじゃないか。俺はもう我慢出来ないんだーー！」

「い、一夏ー！」

そして、二人の唇が少しずつ近づいていった。

-----妄想終了-----

「フ、フフフフ。し、仕方ない。なら私が最後まで相手になつてや

る。私に任せろ……」「

「あー、箒？ 涙が出ているんだが

・・・・・ハツ！ しまった。何を不埒なことを考へているんだ。まだまだ修業が足りないみたいだ。

「お～い、箒」

「な、何だ！ 一夏」

少し声が大きくなつてしまつた。お、落ち着け篠ノ之箒。慌ててはいけない。

し、しかし少しは期待していいよな。

「そろそろどうしてくれないか？ 重くて」

「・・・」

「第？」

「フン！」

ドカッ！！！

「グヘッ！？」

期待した私が馬鹿だった。この朴念仁がそんなことをするわけがないな。

「・・・ブッ」

「ツー？」

誰かに笑われたような気がした。しかし、セシリ亞や鈴はそんな様子もない。デュノアも例外ではない。けれどもここには他に人はいない。

「篠、探しても無駄だよ。今は光学迷彩が起動しているから

「だ、誰だ！」

「さつき一夏が言つてたじやないか。俺が来ていろつて」

「さつき一夏が言つてた？？？アツ！」

「斑鳩か！？」

「ハイ、正解だよ。よく出来ました」

そして、私の後ろにぼつぼつとした人の姿が浮き上がった。

「どうも、久しぶりだね篠ちゃん

「斑鳩なのか！？」

「一夏もそんな反応してたね。さすが夫婦だね」

斑鳩が笑いながら言うが私の頭には『夫婦』といつ言葉でいつぱいだつた。

「ふ、ふふ、夫婦！？」

「あれ？違うの？」

一夏と夫婦。 い、いい！

- - - - - はたまた第の妄想開始 - - - - -

「ただいま！」

「おかえり、一夏」

玄関に向かい一夏の荷物を持つフローフロのエプロンを着た簞。

「ああ、ただいま簞」

「夕食の用意が出来ているぞ。風呂も沸いているし、どうぞ入る？」「

「そうだな、先になにか食べたいな」

「そうか、分かった。では」

そういう台所に戻るのとしたがいきなり一夏に腕を捕まれた。

「ど、どひつたんだ、一夏」

「篠、俺は夕食を食べるとはこってないぜ」

「では、なにを食べるんだ?」

「分かっこんだら。食べたいのは篠。お前だ」

「・・・!?

顔を赤くし驚く篠。しかし、心の中ではバッチャコーキー!と構えていた篠であった。

「黙つてこるつてこいつのまことこつ意味だよな」

「ま、待て一夏！？」さすがにそ、その、あ、汗をかいているんだ！
だから、せめてシャワーを浴びてから

「ちひダメだー！？」

「キャツー？」

箒を押し倒す一夏。そのまま腹を空かした狼のようだった。

「一夏」

「いいな？箒」

見つめ合ひつ一夏と箒。その雰囲気はだんだんと加速していく。

「ああ、いいぞ一夏。私を食べてくれ」

そういう手を広げ向かい入れる体勢をする。

その姿は官能に満ち溢れていた。

「じゃあ、いただきます」

一夏の顔が近づいていった。

妄想終了-----

2 翼（後書き）

どうだつたでしょ、つか？

変なといひが、・・・多々あつたと申ります。

篇幅へのみなれど、筆をいふな風に書いてしまひしすみませ。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

話が進むにつれて変更などがあると思いますが、宜しくお願ひします。

主人公設定

名前 黒翼 斑鳩（くろよく いかる）

性格は基本的に、おとなしく目立つのは控えているが知り合いには積極的になる。しかし、戦いになると無口になり、敵を倒すためなら何でもやる。

顔は大部分は髪に隠れている。目は黒く、吊り上り睨めつけるように見える。（ソウル・ーターの阿羅を想像してもらえば良いかと）

家が武家のため、剣術、柔術、空手などをやっているため身体能力は高く、喧嘩も負け知らず。

簪とは婚約者であり、仲は良いが結婚までは考えていない。簪の姉・・・樋無は苦手であり、会つと一日散に逃げる。本音や虚とは幼少期のときによく遊びこれも仲は良好。

一夏と簪とは小学校のころにいじめられていたのを助けられ、このころから仲良くなつた。

家族構成は、母一人、兄一人、姉三人。父親は事故で亡くなっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6264y/>

インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

2011年11月23日12時45分発行